

て今に悲嘆を伝える。参考として森朝男氏の「福島へ」を挙げておきたい。

本田一弘

・大関も関脇もぬる空の雲われら地上の前頭なり
伊藤 一彦

・雪はゆき暮しを白く閉ざしつつ濁点を帯びふる雪重し
佐々木寛子

・野生化した浪江の牛ら飼ひ主を待つ如く待たぬ如くさまよふ
山口 明子

・追悼、愛国、右へ傲へといふごとくとりこロールの顔が増えゆく
松本 実穂

・「玄関は0.1ミリシーベルト」とのみ告げて係員去る
天野 明

伊藤作、宇宙的視点で人間の存在をユーモラスに捉えている。佐々木作、「雪」という濁音の言葉を通して自分の住む土地を見つめ直す。山口作、人間の傲慢な行為が浪江の牛をさまよわせた。野生化した牛らを見つめる作者のやさしい眼差し。松本作、パリ同時多発テロに反応した人間の雪崩打つ思考の脆さを鋭く指摘する。天野作、福島に住む作者が日常の一コマを淡々と歌っていて重みがある。数字の非人間性を思う。

小川真理子

・鳥が好きで住さんは鳥になったのだ眩しく飛んでいるのが見える
宇都宮とよ

・入口とも出口とも見え丘陵の街に反映つよき窓あり
小川 祐子

・スカイツリースポット私は持つてゐる井荻の線路を跨ぐ通路に
野見山鈴子

・みんなみの阿蘇みえなども避難所の冷えゆく闇を思ふ吾らは
本田 一弘

・まとまってモザイクがかった難民の横通りぬけるゲーグルマップ
佐佐木定綱

宇都宮作、のびやかな口語が生前の住さんの姿と〈今〉を彷彿とさせる。小川作、丘陵地に住む高齢者の問題などを思い出した私は、「窓」が外出できない人の幻の扉のようにも思えた。野見山作、スカイツリーを、日常の堅実な足元から詠んで新鮮。本田作、当事者にしか分からない痛みを歌って地方から地方への相聞歌のよう。佐佐木定綱作、「難民」を一括りにして捉えがちな今日の世相を切れ味よく表現した。

加利川友子

・上の歯に金属片を埋められて新たな「我」を感じて帰る
佐佐木定綱

・十二桁の数字の羅列として「われ」は首筋寒く認証されつ
谷岡 亜紀

・忘れたき記憶をいつも通せん坊われの背中の肉の厚さよ
山脇乙子

・身の内に扉はありておまへ来るまでのその扉のひそやかなこと
佐藤モ二カ

・背伸びしたり身を屈めたり円内で三角形はかたち変えおり
清水あかね

身体を通して「われ」を歌った作品から選んだ。佐佐木作、身体に異物が入ることから新たな「われ」を発見するという不思議。谷岡作は簡単に数字に置き換えられ、それでも「われ」として認証されるという怖さ。自身の身体に制御される「われ」を愛おしむかに歌った山脇作。対照的に、佐藤作では、身体を使って新しいいのちを待ち受けようとする「われ」。清水作の円のうちの三角形は社会の中の「われ」として読んだ。

佐久間得幸

・稽古終え夜十一時大都会チャリですううつと坂道下る
矢代 朝子